

<鳴澤巖教授退職記念特集>鳴澤巖教授のご退職をお祝いして

渡邊, 一夫 / WATANABE, Kazuo

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

22

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

1

(発行年 / Year)

1994-03-24

鴨澤 巖教授のご退職をお祝いして

渡邊 一夫

鴨澤 巖教授は、1994年3月をもって、40年にわたって勤務してこられた法政大学を退職されます。この時にあたり、来歴と研究の成果、人となりの一端をご紹介します、お祝いの言葉としたいと思います。

鴨澤教授は、1954年4月、文学部講師として法政大学に迎えられ、1965年4月、教授に昇進、現在まで勤めてこられました。

この間、1970年4月から9月まで、文学部長の任にありました。数回にわたる海外留学、多数回の海外出張（国際学会での研究発表など）、国内外の諸学会等の役員、その中では特に、経済地理学会評議員、日本地理学会常任委員、地理教育研究会委員、IGU（国際地理学連合）の経済地域区分委員会通信委員、埼玉県社会経済調査会理事などを歴任されました。

研究の主題とその成果については、別項のように多数・多方面にわたっております。教授の学問研究の軌跡を、評者の独断で、一言をもって申すなら、次のようになるかと思えます。

(1)社会階層の重層性と地域性を具体的な地域から検証する。(2)それから導きだされるものを、「地域論」としてまとめ、さらにフィールドワークの素材へ反映させ、検証する。

初期の段階から引き続いてフィールドとしておられる日本の山村——いまも岩手県沢内村や静岡県龍山村を続けて調査されています——、1960年代からの沖縄離島調査、最初の在外研究以前から手がけてきたトルコ共和国の近代化について、それから発展した、西欧へのトルコ人出稼ぎ労働者と家族に対する多くの現地調査等。そのほか、発展途上国の都市の特質、在日タートル（人）研究などもこれに入ります。

第2の点は、多くの部門にわたる出版物・論文に対する書評や討議として数えることができます。また「地誌」というもの——つまり、学問体系として自然科学と社会科学という全く異なった方法論を混ぜて、単一の・あるいは統一された“地理学”を名乗る「科学」が存在するか否か——多分に否定的なのはおわかりでしょう——という、大きな疑問を掲げて来られたのも、鴨澤教授を中心とする研究グループでありました。この疑問については、現在に至って同調する研究者も、少しずつ増えてきています。

* * *

話題をかえて、法政大学の中での鴨澤教授を、「鴨ゼミ」と受講生たちが呼ぶ、鴨澤ゼミナール、人文地理学演習から見ましょう。毎年、いくつかのテキスト輪読の形をとるのは他と同様ですが、ある時は、受講生を二分して攻める側と守る側に分け、当日のテーマ発表者をも捲き込んで、論争の火花を散らす……—という、冷やかに覗く他の学生もいたと、語り種になっています。ゼミ生によれば「…本文を要約し、キーワードを拾って…近づいていく。そして議論。テキストを勉強…でなく、テキストで勉強する。チンピラ学生でも、大先生のお書きあそばしたテキストの欠点を見つけて、いちゃもんをつけることだってできる……」（1988年度生の今野君）。「鴨ゼミ」の面目躍如というところです。教授は「どうすれば卒業論文でD——落第点——をとることができるか」という逆説的卒論・論を展開して、学生に説明したこともあります。飾らない、普段着の似合う方です。

* * *

法政大学を去られる時になりましたが、今後もお元気でご活躍なされることを祈ります。日本社会ではとても困難だと考えられた1950年代から、同じように働いて来られた久代夫人と、たまには一緒に旅行にゆかれるなど、これからは寛ぐことのできる時間をお持ち下さい。後に残る後輩の皆さんともども、この停年という節目の季節を心からお祝い申し上げます。